当センターでは『発達障害理解のための講演会』を平成21年度より開催しています。今回は、「自閉症と家族を語る」をテーマに、自閉症の息子をもった母親と周囲の人々を描いた映画「学校Ⅲ」をめぐり、監督の山田洋次氏と、その原作「トミーの夕陽」の著者鶴島緋沙子さんに対談をしていただきました。内容の一部をご紹介します。

自閉症と家族を語る
～映画「学校Ⅲ」をめぐって

発達障害理解のための講演会
●主催：世田谷区発達障害相談・療育センター
●後援：社会福祉法人嬉泉

対談：映画監督山田洋次氏×鶴島緋沙子氏「学校Ⅲ」原作「トミーの夕陽」著者

「学校Ⅲ」と「トミーの夕陽」

山田：みなさんこんにちは。山田です。まず、映画「学校Ⅲ」を制作した経緯と鶴島さんの「トミーの夕陽」を原作としたことについてお話したいと思います。

私は、人と競うのではなく、同じ目標をもって共に励まし合いながら学ぶ人々を描こうと「学校」シリーズを作りました。「学校Ⅲ」はその3作目で、資格試験を目指し共に学ぶ中高年を描いたNHKのドキュメントをみて、職業訓練校に興味をもったのがきっかけです。しかし、なにか骨になるものがない。

悩んでいた時に鶴島さんの「トミーの夕陽」を読み返し、自閉症の息子と暮らす行動力のある勇猛果敢な、職業訓練校に通うお母さんを主人公とすることにしたのです。主人公役の大竹しのぶさん、トミー役の黒田勇樹くんとも一緒に鶴島さんのお宅で自閉症の息子さんと共に過ごしました。自閉症についても私たちは鶴島さん一家から多くのことを学ばせていただきましたが、自閉症と診断された時のお話が印象にあります。

鶴島：次男は今50歳を過ぎましたが、2歳のとき、その頃まだなじみのなかった「自閉症」との診断を受け、通院を始めたもののどうも納得がいかない。そんなとき若い男性医師の「言葉は大切です。同じくらいの歳の子たちの中に入れて触れ合っていくのがいい」という言葉が私のなかでストンと落ちたのです。「そうだ、この子のことを一番知っている私がこの子にあった方法で育てればいい。」と決めました。ときには大変な思いもしながら、普通の子どもたちのなかに入れて育ててきました。

地域で育ち、その出会いのなかで

山田：トミー役の黒田君と息子さんが一緒にいるのを見てどうでしたか？

鶴島：息子は15年間新聞配達を続けていまして、黒田さんは一緒に配達してくれました。新聞配達は、時間にきっちり、配達する家は決まっている、人と接触しなくてすむ・・・息子の特性にぴったり！　と思ったんですが、やはり心配もありますよね。そうしたらバイトの子が「僕、中学の陸上部での一年下におって鶴島君知っとる。僕が教えたる」と。店長さんもそれならと安心されて雇ってもらえました。地域の学校に行ったから、知り合いができて助けてくれ、仕事が続けられたんだと思ってます。

実は、今、会場に黒田さんがみえています。少しお話していただけますか？

黒田：映画で、主人公の自閉症の息子トミー役の黒田です。僕は息子さんと一緒に過ごせて楽しかったです。

山田：どういうところが楽しかった？

黒田：とっつきにくいのは確かですが・・。ユニークで楽しくてやさしくて。さりげなく僕の座る場所を空けてくれたりとか。朝4時から一緒に新聞配達をしたときも、言葉を交わすわけではないのですが、でも視界の端っこに入れてくれているのがわかりました（笑）。

鶴島 緋沙子
1934年生まれ、大阪府出身。作家。枚方自閉症児（親）の会代表。97年「トミーの夕陽」出版。09年「トミーの夕陽」英訳版出版。11年エッセー集「もぐらの目」（つげ書房新社刊）出版。

いろいろな人がいてこそ
―寅さんと障害児が教えてくれたこと

山田：「寅さん」の渥美清さんは、とても頭のいい、人間観察に優れた人でした。小学校のとき「自分と（発達障害の）友だちは勉強はできなかったけど、勉強を競う他の子どもを観察していたんだ」そうです。また「1等になるより、フレーフレーと人を応援する立場でいたい」といっていましたね。

ところで、私は「学校Ⅱ」（シリーズ第2作）で北海道の高等養護学校で寮生活を送る知的障害のある子どもたちの話を映画にしました。先生たちは生徒たちが可愛くてしかたがない、でも卒業式で送りだすとき、彼らのこれからの困難さに顔を曇らせます。そんななかに、もとこちゃんというダウン症の女の子がいて、私が「もとこちゃんみたいな子がクラスにひとりいれば、穏やかで平和でいいんじゃないでしょうか」と聞くと先生は、「山田さん、世の中そんなに甘くないですよ。やさしくする子は2割か3割ですよ」と。

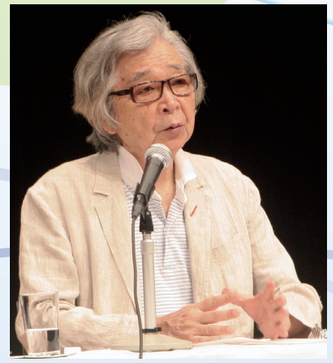
鶴島：いいじゃないですか、2割でも、それだけいるんだったら、それにかけてみても。かえってみんなで寄ってたかって親切にされたら自閉症の子は「うるさくてかなわん」（笑）

山田：もとこちゃんのお母さんから大きい音や、激しい感情にも弱いと聞いていたので、彼女が控室に入ってくると、それまで大声で騒いでいた共演の子どもたちがとたんに穏やかに、言葉遣いまで丁寧に（笑）。お母さんがおっしゃるには、映画に出て本人も変わったそうです。周囲が変わり、本人もまた変わったんですね。

鶴島：本当にそうですね。実は息子が小学生の時、プールの着替えを女の子の前でしてしまい、「鶴島クン、キャー」と大騒ぎになって。すると同級生の男の子たちが「男の風上にもおけん。タオル巻けやー」と教えてくれたんです。それ以来、家でも風呂上がりはきっちり巻いてますよ。息子は人間として社会で必要なことを、親でもなく先生でもなく友だちから学んだのです。

山田：私が「学校」シリーズを通し一貫して描きたかったのは、教室にはいろんな人たちがいて、教室は学ぶ喜びにあふれ、協力しあう場であるということです。そしてまた、子どもは地域で、いろいろな人の中で叱られたり、ほめられたり、いろいろな人に見守られ、いろいろな人と触れ合い、ぶつかって、跳ね返りながら成長していく。そういう機会や環境をつくっていくこと、私はそれが共に育つということだと思っています。（終）

（文責・世田谷区発達障害相談・療育センター）



山田洋次氏
1931年生まれ、大阪府出身。映画監督。『男はつらいよ』他、『家族』、『幸せの黄色いハンカチ』、『学校』など数多くの名作がある。04年文化功労者、08年より日本藝術院会員。

映画『学校Ⅲ』

山田洋次監督による「学校」シリーズの第3作。1998年公開。

都立の技術専門校（職業訓練校）のビル管理科に通う人たちの、心の触れ合いを描いたドラマです。鶴島緋沙子さんの著書「トミーの夕陽」から母と自閉症の息子のエピソードが織り込まれています。

あらすじ

主人公の小島紗和子（大竹しのぶ）は10年程前、夫を亡くし、その後自閉症の一人息子、トミー（富美男（黒田勇樹））を女手一つで育ててきた。

しかし、紗和子は不況のあおりで勤めていた職場を解雇されてしまう。そして再就職のためにボイラー技師資格を得ようと都立の職業訓練校へ通いだす。その仲間にはリストラされたサラリーマンや、倒産した町工場の社長、元喫茶店マスターなどがいた。その仲間のひとりが大企業をリストラされた高野周吉（小林稔侍）だった。ある日、周吉が紗和子の忘れた教科書を届けたことから二人は、次第に心を通わせていくのだが…。

鶴島緋沙子氏の「トミーの夕陽」中のいくつかの作品をもとに、自閉症の人の厳しい現実とともに、紗和子と16歳の自閉症の一人息子トミーを取り巻く人たちの温かくまた前向きな様子が描かれている。

山田洋次監督の人間に対するまなざしが随所に感じられる作品。

「学校Ⅲ」原作
『トミーの夕陽』

「トミー」と呼ばれる自閉症の30歳代の青年と、母親「カーサン」をめぐる連作6作品を含む短編集。こだわり行動、パニック、社会性の欠如など、自閉症の人の特性をめぐり引き起こされる様々な人間模様が、母親との日常を中心に描写されています。自閉症の子どもをもつ母親ならではの作品。

映画「学校Ⅲ」のなかでも、作品のなかの新聞配達、事故、母親の入院を巡るエピソードなどがたくさんとりあげられています。

（つげ書房新社、1997年刊。）

会場の声

●山田監督のお話に、全ての人に対するやさしさを感じました。これが広まり世の中の発達障害への理解につながればいいと思いました。

●時間が足りなかった。もっとお話を伺いたかったと思いました。

●託児保育があったので、夫婦でゆっくりお話を聞けました。

●鶴島さんの、母親ならではのいきいきとした体験談や本音を聞くことができてよかったです。